



明治学院大学ボランティアセンター
設立 25 周年記念イベント

大学でボランティアをすること ～実践と学びを往復する～

日時：2024 年 3 月 7 日（木）13:30-16:40
場所：明治学院大学・白金校舎本館 1201 教室

明治学院大学ボランティアセンター

明治学院大学ボランティアセンター設立 25 周年記念イベント

大学でボランティアをすること～実践と学びを往復する～

日時：2024 年 3 月 7 日（木）13:30-16:40

場所：明治学院大学・白金校舎本館 1201 教室

108-8636 東京都港区白金台 1-2-37

03-5421-5113

13:30 開会の挨拶

猪瀬 浩平（明治学院大学 ボランティアセンター ボランティアセンター長）

13:40 報告

「明治学院大学ボランティアセンターでは学びと実践をどう位置づけてきたのか」

磯野 昌子（明治学院大学 ボランティアセンター ボランティアコーディネーター）

及川 恵美（明治学院大学 国際学部国際学科 4 年）

14:15 基調講演

「体験の言語化について：WAVOC の取り組みから」

兵藤 智佳（早稲田大学 平山郁夫記念ボランティアセンター 准教授）

15:15 パネルディスカッション

「学びとボランティア実践とを往復するには～言語化を意識する意味」

《パネリスト》

兵藤 智佳（早稲田大学 平山郁夫記念ボランティアセンター 准教授）

岡本 実哲（明治学院大学 ボランティアセンター ボランティアセンター長補佐）

砂川 秀樹（明治学院大学 ボランティアセンター コーディネーター）

及川 恵美（明治学院大学 国際学部国際学科 4 年）

《司会》

猪瀬 浩平（明治学院大学 ボランティアセンター ボランティアセンター長）

16:40 閉会の挨拶

林 公則（明治学院大学 ボランティアセンター ボランティアセンター長補佐）

報告

「明治学院大学ボランティアセンターでは学びと実践をどう位置づけてきたのか」

磯野 昌子（明治学院大学 ボランティアセンター ボランティアコーディネーター）

及川 恵美（明治学院大学 国際学部国際学科4年）

磯野 ボランティアコーディネーターの磯野です。初めに私から、本日の主題に合わせて、ボランティアセンターの紹介も兼ねて、取り組みをご紹介したいと思います。

まず初めに明治学院大学の教育理念について、先ほど開会挨拶をされた猪瀬先生のお話にもありましたが、創設者のヘボン博士が生涯をこの精神で貫いたということで、Do for others what you want them to do for you というマタイの福音書の一部から、Do for Others という部分を取っています。これはかなり学生にも浸透しており、入学から何度も聞かされている言葉になっています。

この25年間のあゆみですけれども、1995年の阪神淡路大震災、ボランティア元年といわれた年に、明治学院大学でも学生が活動したいということで集まって、宗教部を中心にボランティア活動が始まりました。1998年にそれを組織化して、まず横浜キャンパスのほうにボランティアセンターが設立されています。その3年後に白金キャンパスのほうにも作られました。それから約10年後、規定の改定があり、ボランティアセンターは共通教育機関として、Do for Othersの精神にのっとった、人間教育を行うということが明記されます。ボランティアセンターは、ただ学生をボランティアに連れて行くのではなくて、ボランティアを通して教育をする組織なんだということが、明文化されました。翌年、東日本大震災が起これ、そこでまた大きく活動が展開されていきますが、それが少しずつ落ち着いてきた2016年に、ボランティア・サティフィケート・プログラムという、ボランティア教育の中心になるプログラムが開始されます。2020年にその延長として、ボランティア大賞ができます。それらが少しずつ成果を出してきたのが、現在だと思えます。

ボランティアセンターでは、毎年、基本方針を策定していますけれども、主に4つあります。第一に、学生・教職員によるボランティア・市民活動の立ち上げサポート。学生だけではなくて、教職員の活動の立ち上げもサポートしています。それから2番目に市民活動・ボランティア活動と、大学での学びの融合をサポートする。3番目には地域団体や市民団体との協働。そして4番目に情報収集・発信です。

ボランティアセンターとして「ボランティア」の共通の定義を持っているわけではないんですけれども、猪瀬先生が3年前にセンター長に就任されたときに基本方針に組み込んでくださった定義がこれです。Do for OthersのOthersとは誰なのかということを示していると思えます。

ボランティアセンターの教育プログラムを支えている教職員は、センター長、センター長補佐の2名、そしてコーディネーター3名です。これ以外に白金キャンパスと横浜キャンパス合わせて職員が6名。その他に、ボランティア・サティフィケート・プログラムというのは大学全体で行っていますので、学部から1名ずつ選出される運営委員の先生方も指導をしてくださっています。非常に充実した体制があると思っています。

こちらはボランティアセンターが提供しているプログラムをまとめたものです。各プログラムをHOP、STEP、JUMPという段階別に位置づけています。初めに、社会課題に出会う場として、1 Day for Othersという1日社会貢献プログラムを提供しています。非常に学生に人気があり、今年は90プログラムと過去最多のプログラム数を実施するなど、たくさんの地域団体や

市民団体の方に協力をいただいています。また、コロナ禍にオンラインで始まったボランティア・カフェを開催しています。現場のゲストをお呼びして、学生とともにトークをする場をつくっています。

次に STEP として、実際に活動をするときのサポートプログラムがいくつかあります。いつでもボランティアチャレンジ、ボランティアファンド学生チャレンジ、そして災害遠征支援金。これらは主に助成金プログラムですが、いつでもボランティアチャレンジは短期の、ボランティアファンド学生チャレンジは、約1年間を通して支援金を出して、活動をサポートしていくものです。災害遠征助成金については、コロナで遠征することが難しくなってきたからは、ほとんど使われていません。最後に JUMP として、学びの成果を伝える場としてのボランティア大賞があります。本日のテーマである、ボランティア実践と学びを融合するためにあるプログラムとしては、サティフィケート・プログラムとボランティア大賞があります。それぞれについて、もう少し詳しく説明させていただきます。

まず「ボランティア・サティフィケート・プログラム」とは、正式には「明治学院大学教育連携ボランティア・サティフィケート・プログラム」と言います。このサティフィケートを取るためには、三つの修了要件があります。まず、入学してからボランティア実践を135時間以上する。これは最初、学生が見ると、こんなにできないのではないかと心配するのですが、実際に活動すると、300時間とか、たくさんの時間数を報告してくれる学生がいます。それからインテグレーション講座の受講。これはボランティアセンターが提供している講座で、4回受ける必要があります。この講座はコーディネーターと、各学部から出てくださいる運営委員の先生が指導をしています。そしてもう一つが指定科目の履修です。これは大学側からこれを取りなさいという科目指定をしているのではなくて、学生が自分の実践に参考になったり、影響を受けた科目を三つ以上、自分で指定します。最終報告書では、授業での学びが自分の活動にどのように影響を与えたのかということを書きます。ボランティア・サティフィケートの認証委員会は学長と学部長から成る組織ですが、そこで修了要件を満たしたということが認定されると、サティフィケートを取得することができます。

このプログラムは、入学から修了まで3年かかります。毎月 manaba というクラウド型の教育支援システムを通して、レポートを出してもらいます。いつでもどこでどのような活動をしたのか、その活動を通して自分にはどんな学びがあったのかを書いてもらい、それに対して、コーディネーターがフィードバックをするということを繰り返していきます。

その3年を通して、学生たちに身に付く力として、観察する力、デザインする力、理解する力という三つを挙げています。観察する力は、長く現場に関わることによって身につきます。例えば、社会福祉作業所にずっと通っていると、相手のちょっとした変化に気が付くようになります。この人はこんなこともできたんだとか、こういう呼びかけをしたら、こんなふうに反応してくれるんだとか。毎月報告をすることで、観察により変化に気づく力が育つのだと思います。理解する力は、自分がやっている活動が現場ではどういう意味を持っているのかということ、書くことによって考えるようになっていきます。また、大学の授業での学びを、体験を通して理解していきます。例えば社会運動論という授業を取って、自分がやっているのは単なるボランティア活動だと思っていたけれども、運動として社会を変える意味があったんだというように、理解を深めることができるようになります。そして最後に、自分のやってきた活動とそこでの学びを、自分の言葉で表現していく力が身につきます。さらに、それをキャリアデザインとして、自分のキャリアにつなげていくこともできるようになります。

もう一つ、実践と学びを融合するプログラムとして「ボランティア大賞」があります。元々これはサティフィケート・プログラムの学生が最後に発表する場として「学びに基づくボラン

ティア実践プレゼンテーション大会」という名称で行っていたものを、2020年に一般の学生にも門戸を広げて作られたものです。これもただ活動を評価するのではなく、活動とそれを通じた学びの両方で優れた成果をあげた者を表彰しています。2023年度の受賞者のタイトル一覧を見ていただくと、LGBTQの啓発に関するもの、地域づくり、SNSを通じた若者の相談支援、非行少年の社会復帰のために支援など、実に様々なボランティア活動をしていることが分かります。

それでは、ここでボランティア・サティフィケート・プログラムで、実際に学んでいた及川さんから、自分のボランティア活動とそれによる学びについてお話しさせていただきます。

及川 皆さん、こんにちは。明治学院大学国際学部国際学科4年の及川恵美と申します。本日は『学びとボランティアの往復 多文化共生とアイデンティティ』についてお話しできたらと思っています。どうぞよろしくお願いいたします。

まず私のプロフィールを簡単に紹介すると、このようになっています。特に下にキーワードである多文化共生、アイデンティティ。外国にルーツを持つ人を頭の片隅に置いて、聞いていただければなと思っています。

まず私が大学でボランティアを始めたきっかけなのですが、主に二つあります。まず一つ目に、コロナ禍でできることが限られていたこと。二つ目に、小さい頃から国際交流に興味があったことですね。私がかつと大学に入るときに、国際学部国際学科を選んだ理由というのも、小さい頃から国際交流に興味があって、例えば父と母が中国語で会話している姿を見て、育ってきたという背景があったので、そこから他の文化を持つ人と交流することに興味を持つようになりました。本当に偶然なのですが、国際学部の履修要綱を開いた際に、ボランティア・サティフィケート・プログラムの存在を見つけたので、面白そうだなと思いついて、主に日本語ボランティアであったり、ランゲージエクスチェンジといって、自分が日本語を教える、相手から中国語であったり、他の言語を教わるといったところで、主に国際交流中心のボランティアを行ってきました。

まず今回のテーマである、『学びとボランティアの往復』の、その学びからボランティアにつながった例としては、いくつかあるのですが、まず一つ目に、多文化共生各論3つという明治学院の授業を学びました。この授業は日本に住む外国人の現状について学ぶ授業であったのですが、この授業を通して、在日外国人の共通語というのは、意外と英語ではなくて、いわゆるやさしい日本語であるということ、また、在日外国人に対しては、です・ます調で話したほうが伝わるということ、さらに、はっきり最後まで短くを表した、ハサミの法則で話すことで、より在日外国人の方に意思を、メッセージを伝えられるということを知ることができました。また、この授業を生かして、明治学院の留学生に向けた日本語の授業である、日本語実践初級という授業であったり、バディ制度でのボランティア活動で応用することができました。

私が明治学院大学の学びで特に印象に残ったのが、多文化共生各論1と2という授業です。この授業では、日本における多文化共生であったり、日本の難民・移民について学んだ授業であったのですが、この授業を通して、例えば日本の難民認定率が1パーセント未満であること。この右図（各国の難民認定数および難民認定率）というのは近年の写真なので、少し2パーセントに上がってはいるんですけど、それでも難民の認定率が低いということ。また、仮放免の存在であったり、日本には外国にルーツを持つ子どもたちが多くいんですけども、その子どもたちに対して、学習支援が不足していることを学びました。実際に授業の中で、横浜市にあるわたぼうし教室という学習支援教室に伺わせていただいたんですけども、実際に学習支援をすると、日本に6年以上住んでいながら、私と日本語で話していても、日本語を理解して

いるか怪しいかったり、漢字の読み書きができていても怪しいというような子もいて。何よりも自分自身が長年、日本に住んでいながら、そういうことを全く知らなかったということにショックを受けました。

私が今まで国際交流中心にボランティアをしてきたのですが、一口に日本語ボランティアといっても、主に二つに分かれていたと思います。まず一つ目に、日本語を学びたい留学生であったり、日本語に興味がある人に対してボランティアを行う、日本語ティーチングアシスタントとしてのボランティア。二つ目に、日本語を学ばなければならない人である、外国にルーツを持つ子どもたちであったり、ある日、突然、日本に来て、日本語を必要とした人に対する日本語学習支援の二つがあると思います。このボランティア活動を通して、日本語に興味がある人よりも、むしろ日本語を必要としている人に対しての支援が足りていないということと、わたぼうし教室での学びもそうなんですけど、日本での滞在期間が長いということが、必ずしも日本語能力が向上するということとつながらないこと。また、移民・難民の法制度であったり、日本語教育を通して、在日外国人に対する日本政府の態度があまり良くないということに気付くことができました。

そのため、私はそこから在日外国人であったり、難民・移民問題に興味を持ったので、多民族国家として有名なアメリカであれば、もっといろいろなことについて学べるのではないかと思い、長期留学させていただきました。この留学を通して気付いたことがありまして、多民族国家であるということは、必ずしも移民に対して寛容な制度ではないことを学びました。しかし、自分の留学生活を通して、アメリカに住んでいる人というのは、自分のルーツを大事にする、誇りに思う国民性であって、例えば中国のルーツを持っていたとして、たとえ中国語を話すことができなくても、自分自身は中国系アメリカ人なんだとあって、中国の文化であったり、そういった中国の文化に関する行事に参加していて、それに自分自身もルーツを肯定的に考えられるようになりました。

というのは、自分自身の背景としては、自分自身は母が台湾出身で、いわゆる日本と台湾のハーフで、小さい頃から、父と母が中国語で話す環境で育ってきたのですが、自分自身は中国語を話すことができなくて、ちょっとそれがコンプレックスになっていました。いわゆるハーフであると、中国語を話せる、もう一つの言葉を話せるというのが当たり前みたいなイメージがあって、中国語を話せるのって聞かれて、話せないっていうと、ちょっとがっかりされたような顔をされることもあったので、それがちょっと悲しくて、自分自身のルーツを隠していたことがあったんですけど、留学を通して、あるときに留学フェアで、台湾の大学交換留学で人員が足りていないときに、アメリカ人の人に私に手伝いに来てほしいと言われたことがありまして、私は何でって聞いたら、だって台湾にルーツがあるじゃんっていうふうに聞かれて、そういうところでちょっと視野が変わったと言いますか、そういったところで自分自身の言葉を話せるかどうかは関係なく、自分自身のルーツをもっと大事にしたいというように考えるようになりました。

そこから留学の生活を通して、アメリカ人は自分のルーツを大事にしているというイメージを持ったので、自分自身のアイデンティティーは、住む国の文化的側面であったり、社会的法制度が関係するのかということを中心に、アメリカに住む外国にルーツを持つ人と、日本に住む外国にルーツを持つ人で、それぞれインタビューして、違いがあるのかという比較をしていきました。その結果、意外と住む国の文化的側面であったり、社会的法制度というのは関係していなくて、例えばインタビューしていく中で、自分自身のアイデンティティーは血統が大事であるというふうに答えた人もいて、どの言語を話せるかが大事であるというふうに話していた人もいました。なので、どの要素を重視するかで、アイデンティティーが多様になり得

る。また、私自身がアイデンティティー、もともと日本人である。100パーセント日本人であったのが、留学を通して中国語も学べたので、日本と台湾のハーフというふうに変ったんですけど、他の人にインタビューしていく中で、言語もアイデンティティーの。はっきりとは言えないのですが、アイデンティティーは言語も1要素になり得るということに気付くこともできました。

学びとボランティアの往復を通して、自分自身で視野が広がっただけでなくて、自身のアイデンティティーを見つめ直すきっかけになったと考えております。そこから考えたことは、ボランティア活動が与える可能性は無限大のものであると考えています。もともと学問とボランティアって別のことであると考えてたんですけど、サティフィケート・プログラムを通して、自分自身がボランティア活動を通して、また学問を通して、何に気付くことができたかというのを振り返る時間ができましたし、人って一回したことを忘れてしまいがちだと思うんですけども、こうしてサティフィケート・プログラムで振り返ることによって、次の学びへと生かすことができたので、ボランティア・サティフィケート・プログラムは、自分にとって意義のある場であったなと考えております。

最後に私にとっての Do for Others です。私にとっての Do for Others とは、自分自身のルーツを大切に、「アイデンティティーを尊重し合える環境をつくりたい」というふうに考えています。私のように自分自身のアイデンティティー、ルーツを隠している人は、まだ他にもいるのではないかと考えています。でも、自分自身のルーツを公の場でもさらけ出せるような場になれば、多文化共生社会の第一歩へと、さらにつながっていくのではないかと考えております。以上です。ご清聴いただき、ありがとうございました。

磯野 及川さん、ありがとうございました。この後、本日発表予定でした学生の岩倉さんが準備してくれたパワーポイントをご紹介しますと思います。

このきれいな写真は、スウェーデンのストックホルムの駅から撮った写真だそうです。岩倉さんはとてもたくさん活動をしていますが、この中から特に最初の困窮者支援の活動、そして学習支援の活動、パヤオプロジェクトの三つについてご紹介します。

まず、パヤオプロジェクトというのは、パヤオセンターというタイにある YMCA の施設で、貧困のために売られていく子どもたちが多くことから、シェルターの施設、児童養護施設となっているところです。パヤオセンターと明治学院大学は、中高大連携プロジェクトとしてつながりを持っており、岩倉さんはこのプロジェクトに参加する中で、もし自分がタイに生まれていたら同じ境遇になり得たんじゃないかということを感じたそうです。パヤオプロジェクトでは本当はタイに行くはずでしたが、コロナ禍の影響で行けなくなりました。そこでオンラインでの交流プログラムを自分たちで企画したり、タイのことを伝えるために講演会をしたり、「パヤオミールプロジェクト」として学食でタイ料理を提供してもらったりと、自分たちにできることを考えながらコロナ下で工夫した活動をしています。

また、困窮者支援では、最初は大学のアウトリーチの活動として、江戸川の路上生活者の現場に行き、大学の教室で勉強したことと実際に直接出会って感じるものの違いを強く認識したそうです。ここでも、いつ自分も同じ立場になっていたか分からないと感じ、自分には何ができるんだろうということを模索して、毎週のように江戸川に通うようになりました。現在は、自分で企画をして、「いつでもボランティア」という助成金のプログラムを使って、江戸川のお掃除の活動と居場所づくりの活動をしています。路上生活をしている野宿者の人たちが、孤立をされていて居場所がない、特に精神障害のある方が多いということが分かり、そういう人たちが気軽に集まれるような場所として、クリスマス会の企画をしたりしています。岩倉さんは

「応答責任」という言葉を使っていますが、出会ってしまった自分はこの人のために何ができるんだろうということを常に模索しながら活動を続けているということが、報告書に書かれていました。

もう一つ、中学生の不登校の児童に対して学習支援活動をしています。自分は親でもなく先生でもない。少し先輩という立場でお話をしたり、一緒に勉強をしたり、時には相談に乗りながら、身近なロールモデルとして接する中で、支援する女の子が、最初はとても人見知りで、おとなしくて消極的だったのが、とても明るい顔に変わっていき、いろんなことを話してくれるようになったという、相手の変化を記録して報告をしてくれました。大学生だからこそできる活動だったのではないかと書かれています。

これらの活動に、授業の学びがどう生かされたかということでは、高齢者福祉論の中での「死の認証性」という学びが、自分の体験を言語化してくれたと言っています。一人称の死、二人称の死というのは、家族や隣人など親しい人の死。そして三人称の死は、ニュースで流れるような数で示されるような他人の死です。そうした自分と関係ないと思っていた他人の死が、会うことで自分と関係のある二人称の死に変わっていき、自分事化されていく。ボランティアとは、そういう三人称で他人事だったことが自分事化することなんじゃないかと、授業での学びを深めています。また、「SDGs 理論」では、自分がマイノリティになる経験を通して多文化共生への理解が深まることが分かり、実際にスウェーデンに留学をしたときに、そのことを実感として学んだとあります。他人事として外から見ていたところに、自分が入っていく。そしてそれが自分事化されていく。自分事として引き受けていく営みこそが自分にとっての Do for Others であり、ボランティアなのではないかと提起しています。

及川さんと岩倉さんのお二人の学びのプロセスをまとめると、まず他者との出会い、社会課題の気付きというものが始まりにあります。そこから基礎的な学びによって、その社会課題の裏にはどういう理由があるのかということを理解していく。また、やさしい日本語など実践に役立つ知識、技術といったものを習得していく。知識や技術と現場の課題がつながっていく。それらを報告書に書くことで自分の活動と学びを振り返りながら、アイデンティティーの問題など自分自身の関心や課題につながり、内面化されていく。さらに3、4年生になって、応用的な学び、専門的な学びを通して理解が深まり、自分でも調査をしたり、課題を追究して、最後にそれを言語化する。そういった実践と学びの循環ができているのではないかと思います。

ただし、この二つのプログラムもいろいろな課題があります。ボランティア・サティフィケート・プログラムは、実践と学びの往復によって実践も学びも深まるという良さがありますが、時間が長くかかることもあって、登録者数がなかなか伸びません。1年次には60名くらいが登録しますが、年々脱落して登録者が減ってしまいます。専攻学科によっては実践との結び付けが難しいということも課題です。

ボランティア大賞については、言語化と、限られた短い時間の中で発表する力がつきませんが、活動自体の優劣はつけられないため、結局はプレゼン能力の高さで順位が決まってしまう傾向があります。また、サティフィケート・プログラムの学生とそれ以外の一般学生とでは、どうしても学びと実践の結び付けにおいて大きな差が出てしまいます。これらをどう乗り越えていけるのかということも課題だと思っています。

まだ少し時間がありますので、特に及川さんへの質問がありましたら、ぜひお願いします。

参加者 先ほど書かれていた、アメリカは多民族国家だけれども寛容がイコールではなかったというのは、留学を通じて体験的に感じたことでしょうか。あるいは学んだことでしょうか。

及川 ご質問いただき、ありがとうございます。私、留学中に移民・難民問題と、多文化共生について学びたいなと思っていたので、それに関連していた授業を取っていたんですけども、例えば多民族国家でありながら、人種差別が存在するというのを、皆さん承知していると思うんですけど、例えば1965年にアメリカではあまりにも移民の人数が増えたので、そこから反対運動が出てしまって、そこから移民に対する厳しい法律ができたり、ten years bar とか three years bar といって、例えば不法移民が1年間滞在していて、もし見つかってしまったら、10年間、アメリカに入ることはできないといった、そういった法律などがありまして、そこから私は、やはりアメリカといったら多民族国家であるし、いろいろな人種が集まっているからこそ、寛容な制度が付いていると思っていたんですけど、むしろさまざまな人種が集まっているからこそ、厳しい法律がないと、国として生き残れないとか、まとめることができないのかなということを書いたので、必ずしも寛容的な法制度ではないということを書きました。

参加者 ありがとうございます。

磯野 報告は以上です。ありがとうございました。

基調講演

「体験の言語化について：WAVOCの取り組みから」

兵藤 智佳（早稲田大学 平山郁夫記念ボランティアセンター 准教授）

ご紹介にあずかりました、兵藤と言います。よろしくお願ひいたします。今日は品川からバスで来ましたが、キャンパスに入った途端に、左側のチャペルからオルガンの音が鳴り、右側に建物があり、ヨーロッパを彷彿とさせる歴史的な建物で、ちょっと厳かな気分になりました。日頃の私の行いを振り返ったりして、邪念を捨てなきゃな、最近俗っぽい私、と思いながら来ました。なぜこのようなこと言うかといひますと、自分に向き合ったり、自分を振り返る、この営みが学びにとってとても大事だという信念を私は持っています。その信念がどんな形で、学びという形になっていたのか、それがどう構造的に、大学の中で授業として成立するようになったのか。そんな話を今日できたらいいなと思っています。

自己紹介をしつつになりますが、先ほどの学生のお話を聞かせていただいて、何が素晴らしいかから入りますと、彼女が自分とは何者かを問う機会となったことです。私はこの社会でどこにいるのだろうか。私は一体何者で、どう他者と生きていくのだろうか。この問いを向けられたきっかけとなったのが、ボランティアだと思ひます。おそらくボランティアから学ぶ、ボランティアと学びを接続するということは、そういうことだと私は思ひます。

私は何者なのか。こうした問題意識を持っていた30代の私がボランティアセンターに就職して、学生に出会いました。そのときに思ひたのが、少し悪口みたいになりますが、学生が語れない。大学生がその体験を語れないということに、ちょっとびっくりしました。というのは、裏を返すと、身内を褒めますけど、ボランティアセンターにくる彼らは素晴らしい学生たちだったのです。例えば、アフリカにも行く、中国の農村に行つてハンセン病の患者を支援する、そうした足が動く学生たちに、ものすごい行動力だと思ひましたし、少し自慢ですけれども、東日本大震災では、早稲田大学は延べ人数で8,000人の学生が東北に行きました。その行動力たるや、素晴らしいなと思ひたし、そんな学生たちとともに学べることは、すごくエキサイティングだなと思ひていた一方で、問題意識としては、何でこんなに語れないのだろう、こんなに素晴らしい体験をしているのに、何じゃこりゃってというような問題意識を持ちました。

それから18年ぐらひ、早大生たちと向き合ってきたわけですが、それが一体どういうことかという、皆さん身に覚えがあると思ひます。ボランティアから帰つてきた学生たちに、「あなたにとってその体験はどうだった？」「ボランティアをした体験はどういうことだったの？」と言うと、「いや、マジやばいっす」と言うのです。これは今も変わらないですよ。やばいって何？うれしかったの？悲しかったの？悔しかったの？憤つたの？どうだったの？気持ちを伝える語彙がない、気持ちを言葉にできない、でも、感性は立っている。言葉にならないけれども、表現できないものがあるのが、やばいでした。最近、エモいになっています。エモいって何？という話ですが、そういう言葉でしか自分の気持ちを表現できない。うちの早大生たち、国語の偏差値67とかですよ。よく言うのですが、67の偏差値を持つ君たちが、気持ちの言葉がない、表現できないことの問題性があります。

報告会をやると、「何をしたのですか？」「泥かきをしました」「その後は？」「子どもと遊びました」。～しました、～しましたと、ずっとやった事実だけを言つて報告が終わる。あなたが何をやったかじゃなくて、やったあなたが何を感じたの？やったあなたが、どういうふうに関心に対して問いを向けたの？というところに行かない。やった事実だけを、ただただ、ただ、

2時間ぐらい話すという報告会を何度もやりました。

これもいい思い出です。「このたびは東日本大震災のボランティアという貴重な体験をしてくれました」「貴重な体験をありがとうございました」「この機会を与えていただいたセンターに～」。もういいから、そんな言葉、貴重って何？言葉に内容がない、本当にテンプレートみたいなこと言います。誰がそのテンプレートを作っているのかという話はおいておきますが、最近の学生にはすごく多いポリティカル・コレクトネスですね。正しいことが大好きです。「多様性が大事だと思います」というようなどこかのパンフレットを切り取ったみたいな、そのまま貼り付けたようなことを言います。正しいことが大好きで、差異を尊重する社会みたいなことを、ちょっと酔った感じで言いますが、では、あなたにとって尊重とはどういうことですかと聞くと、「…」となるんです。「いや、あの、あの一、それ、それ、えー、それが・・・」という感じになります。尊重って、あなたにとっての意味を聞かせてくださいという気持ちになります。おそらくこれは、批判ではありませんが、それを言って褒めてきた小中高の先生がいると私は思っているところがあります。それを言うと、褒められる。他人事です。私はパラスポーツのボランティアも行っていましたが、学生たちは、「それを言えばいいだろう」という雰囲気は読みます。「障害者が一生懸命頑張ってる姿に心を打たれ、多様性が大事だと思いました」。1人が言うと、みんなそうだ、そうだ、そうだと言います。全員、同じ意見か、正しいこと大好きという、これが私の言うところの語れない、語れなさを、恐らく構成してるもの」です。こんな中で、もったいないと思ったのです。こんなに行動力があって、こんなにも揺すられる感性がある学生たちが語れない。語れないから、社会も変わらない。そういう思いの中で、何をしたらいいのだろうかというのが、私のWAVOCでのお仕事の始まりです。

なぜここに問題意識があるのかの、個人的な背景もご紹介すると、自己紹介も含めて、一応大学にいますから研究者ですが、先ほどの言葉を借りると、自分の実践家としてのアイデンティティーもあります。フェミニストです。フェミニストとして、ジェンダー研究もちょっとかじったりしていますが、大事だったのが、私の女性としての体験を語る、この営みです。このことが私のフェミニストとしてのアイデンティティーを構成する重要な、私にとって大切な実践だと思っています。私に起きたこと、私の体験は、「私」だけの体験じゃない。これは「私たち」の体験なんだというところに、フェミニストとしてのアイデンティティーもあるし、女性が社会を変えてきた。まさに運動が持っている力でもあると思っています。

人の言葉ではなく、私の言葉で、私の体験を語る。そのことは自分の問題としても実践してきましたが、2000年ぐらいから、私はDV被害者のピアグループの活動や、自助グループの活動に参加したり、HIV陽性者の自助グループの活動で一緒にやらせてもらったりというかたちで、自助グループの活動にすごく顔を出していました。そこに大切なものがあると思っていたからですが、その自助グループの実践している活動は、体験を語るのです。私がどんな体験をして、何があって、何を感じて、どういうふうにしたいのか。私がどうしたいのかを、ただ語る。ただではありませんが、語り続ける。その中でつながっていく。孤独だった人たちがつながっていき、まさにフェミニストと同じですが、社会に拓かれていく。その可能性みたいなものを、すごく感じてきました。語るという営みそのものが、社会変革になったという、私の一番ベースにあるものは、おそらくこの経験があるような気がします。

そういう私が、学生の語れなさを前にして、何かできることがあるはずだというふうに思っていました。まさに言葉は他者とつながり、社会に拓くための言葉。ここから学びを考えたいということで、作ってきたのが「体験の言語化」ですが、この体験の言語化は一体どんなことをしているのかを話す前に、WAVOCのことを解説したいと思います。

私が拠点としている場所で、平山郁夫記念ボランティアセンターがあります。先ほど平山郁夫

ってだれ？という話になりましたが、日本画家です。日本画家で、1個の作品が億するようなすごいお金持ちです。そこが大事ではありませんが、平山先生は被爆者です。広島で生まれて、広島で被爆をした方で、生涯を世界平和にささげた日本画家でいらっしゃいます。そんな彼が70歳ぐらいのときに、当時の早稲田大学の奥島総長と出会いがあったそうです。そのときに奥島先生が、大学という場所が、学問と教育だけの場所であってはいけない、大学という場所は、社会に拓かれ、社会に貢献するという機能を持たなければいけないという考えをお持ちで、奥島先生と平山先生が会って、ボランティアセンターを作ろうではないかというお話になったというふうに聞いています。そのときに平山画伯が自分の描いた絵を寄贈されて、経済的なところを考えたりという形で、スタートしたセンターです。

奥島先生には私もお会いしたことがあります。当時の理事は全員反対したそうです。何だ、そのセンターは、こんなものは要らんと。大学というものは研究と教育をする場所なのだから、そんなことをやっている暇はないと反対があったのを、奥島先生が総長としてやると決めたらしいです。笑い話になっていますが、それぐらいのある種の、良くも悪くもリーダーシップを発揮した結果としてのセンターです。発足したのは2002年。明治学院大学に遅れること数年ですね。一昨年に20周年記念の企画を実施したので、歴史としては、明学さんよりも遅れた形でスタートしたセンターというふうに思います。

社会貢献するんだという形でスタートしたわけですが、これはちょっと皮肉になりますが、私が入ったときにはNPOや社協、社会福祉協議会を持っているボランティアセンターと何が違うかといったときに、大学のセンターである限り、やはり学生の学びを支援する。この側面を前面に出していくことが大事なんではないかという議論が、当時、ものすごく行われたようで、私もその一部に入っていましたが、一応、ボランティアと学びというのがキーワードとして、発足当初からうたわれる理念になっています。明学さんと似ていますね。ただ、明学さんの場合、キリスト教の理念が後ろにあるところが、うちとは違うなというふうに聞かせていただきましたが、共通しているのは、大学だからこそ、学びが中心に据えられるのは、すごく似ていると思います。

ということで、すてきでしょう、このスライド。気が付きましたか？えんじ色を基調とする、この感じ。早稲田大学に20年ぐらい勤めていますが、けがをして血が出たら、えんじ色じゃないかと言われます。スライドを作ると、ついついえんじ色で作ってしまうぐらい、まみれていましてすけれども、話を戻します。体験的な知と学術の知をつなげる。先ほど明治学院大学のボランティアセンターが言っていたことと、まさに同じだなというふうに思って聞かせていただきました。体験と学術が融合する。先ほど融合や往復という言葉がありましたが、私たちもつなげるとか往還するというイメージで、学術との知を考えています。

ということで、一応、教育目標もあって、自分の生き方を他者との関わり合いの中で紡ぎ出す力を育成したい。2008年ぐらいに教員で作った言語化したものが、今でも使われている理念になっています。これは結構キーワードです。学びというと、論文や理論などのイメージでとらえられがちな言葉ですが、生き方に拡大解釈して、生き方につながっていくような学びを、他者との関わり合いの中で紡ぎ出すというのが、教育目標になります。

そんな往還やつながりというイメージ図を、まさに先ほどの明治学院大学のボランティアセンターがやろうとしています。早稲田大学では、正課と課外を両輪として、学びを応援していきたいと、われわれも考えてきました。すごく似ていますが、異なるのは私たち早稲田大学の平山郁夫記念ボランティアセンターには教員がいることです。私はその1人ですが、所属はWAVOCで学部には所属していません。同様の教員が5名と、あとは大学の専任職員が3名います。配属されてくる職員がおり、ボランティアセンターのトップは、一応、センター長ですが、実質的に組織を動かしているのは事務長である職員です。もともと職員が動かしていた中で、教員が置かれた

のが遅かったので、職員が動いたという歴史があります。意思決定は管理委員会がしていきますが、リーダーシップを取っているのは職員というところに、うちの特徴があり、そこにわれわれのような常勤の教員がいる。そこが違うと思います。

というのは、われわれ教員は大学の授業を5名で、今年は22から23ぐらいの科目を持っています。専門分野が5名全員異なり、経済学の先生もいれば、開発学の先生もいる、ジェンダーの先生もいれば、環境社会学の先生もいる。毎年、少し変わっていく部分もあります。その専門的な授業をWAVOCが提供しています。WAVOCが正課の中で、グローバルエデュケーションセンターの中に入って、そこでWAVOCの提供科目にしてやっています。それ以外に、まさに今日これからお話しする、体験の言語化という科目を提供することになっていますが、その経緯をお話しできればと思います。

そこに行く前に、こんなポンチ絵も描いています。正課と課外があつて、学部があつて、研究があつて、現場の当事者、現場がある。このような概念で授業が進んでいます。

理念も2020年度ぐらいに新しくしたので読み上げますと、「教育・研究・実践を通して社会貢献を行います」。ボランティアと言っていないところがミソです。ボランティアではなく、社会貢献というふうに、ちょっと言葉を換えてきたりしています。次に、「社会課題に対して当事者意識をもって取り組む人を育成します」。これもキーワードです。これは新しくつけた言葉で、今日は触れませんが、当事者意識がすごく大事ではないかという議論を何度もしてきています。最後に、「新しい社会のあり方を創造します」。今の社会ではない、まさに変えていく、変革していく、新しくつくっていく。そういう活動を目指していくという思いを込めた理念になります。

体験の言語化手法ということで、一応、WAVOCメソッドといわれたものを、今や早稲田メソッドというような名づけをして使っていますが、私たちWAVOCが開発・実践してきた教育の手法です。2016年にはこうした形で本を出させていただいて、出版まで漕ぎ着けている教育手法です。今日はその教育手法の細かいことを説明する時間はありませんが、やろうとしたのは、先ほど言ったように、あなたが何を感じたのか、あなたがその他者と出会い、そのフィールドに行きどんな気持ちになったのかをまず言葉にする。その言葉を発したそこから、あなたが社会の課題を発見し、社会と接続していくという手法です。それを私たちはずっと様々なところでやってきました。例えば学生と一緒にフィールドに行くと、フィールドで夜な夜な朝までやるというのもあったし、大学に戻ってきてからミーティングの場所でも、いわゆる一般的には振り返りといわれるものですが、もうちょっと気持ちにフォーカスをして、感性にフォーカスをする形で問うていく。そして言葉を引き出していくということ、ずっとやっていました。それを何となく5人の先生が個人的に共有するような形で、ボランティアセンターとしてやっていましたが、2014年に転機が訪れます。

転機に行く前に、その中でそうした手法を開発してきたときの私たちの問題意識として何をやろうとしたかという、先ほどやばいですと言う学生たち、という象徴的な言い方をしましたが、もうちょっと突っ込んでいくと、学生たちの何がどう問題だと思っていたかといいますと、まずボランティアをすると、助ける学生、助けられる弱い人という硬直した関係性の中でもものが語られるし、自分を位置づけようとする。そんな上下の関係が硬直しているようでは、「あなたは拓かれていかない」というのがわれわれの問題意識としてありました。

先ほど学生の発表にもありましたが、自分もホームレスになるし、自分も被災者になるし、自分もDV被害者になるという想像力が欠如し、自分は助ける人、大丈夫な人というところから傍観者になって、偉そうに分析するという立ち位置に立つ。それ、違うでしょ。「私たち」というところに立たないのです。それがまさに3番にもつながってくる、当事者を巡る社会の構成員という意識の欠如です。なぜこのシングルマザーは貧困なのかということ、自分と結びつか

ない。あなたがつくり出しているもの、市民としてこの社会の構造に加担しているものという意識が欠如している。ここを何とかしなければと思います、問題意識を共有しています。ですから、体験の言語化とは、個人と社会の分断をつなぐ実践として、ボランティアをした学生たちが学ぶ方法論を作っていました。

方法論は後で出てきますので見ていただきます。多分、ここに興味があるだろうなというふう思ったので、今日はこの1枚のスライドを新しく作りましたが、何となくボランティアの先生たちが現場やミーティングでやっていた方法論が、正課として、体験の言語化という科目として成立するようになったのかというお話ですが、そこには教職協働の成果があります。私たちは学生の教育をする実践家としてこつこつと実践をしていましたが、2014年にまさに職員として配属になった事務長が、Waseda Vision 150 (<https://www.waseda.jp/inst/vision150/>) という、2011年からずっと理事や先生たちが作ってる大学の方向性を示すビジョンを熟知していたのです。大学としてどこに進もうとしているのかを、この事務長が熟知していて、その事務長はとても素晴らしい方で、いつも私たちのボランティアの現場に来ていました。その中で私たちがやっている体験の言語化の手法というのを、自分も受けていたのです。だからこそ彼女はこの実践が、Vision 150 であらう教育の方向性に絶対に合致しているという感覚を持っていたのです。

私が事務長のときに絶対やると言って、当時いた大学の理事7人に実践の重要性と、正課と課外の往還の意味を説きまくり、こういう実践がWAVOCであります、Vision 150の理念を実現する方法論がここにあります、ぜひこれを大学のプロジェクトとして位置づけましょうと、7名の理事たちに、時にはたばこを吸いに行く理事を追いかけて説明したのです。その人たちが素晴らしかったおかげで、なんと2014年の理事会で、体験の言語化の科目開発と実践というプロジェクトとして、大学のプログラムに位置づくことになりました。私はリーダーとして、総長の命を受けて、やってきたことを体系化し8回の科目開発するようと言われて、巨額な予算も来て、結構青ざめたのが10年前ですが、もうやるしかないの、科目を開発するというところでスタートしたのが2014年でした。

その事務長がすごく上手だったところが、ボランティアをした体験を言語化するだけでは全学として広がらない、体験が大事なのであれば、ボランティアである必然性はないだろうと考えた点です。それであれば、学生の留学体験、学生のインターンシップ体験、学生の部活体験、そうしたさまざまないわゆる体験というものを言語化する時間として授業を作ろう、そのほうが学生の広がりがあるし、学びとしてもっと広がっていく可能性があるということで、学生たちの体験を広げなさいというふうに言われたのです。私はボランティアの体験を言語化することしかやっていなかったの、どういう体験が学生にあるのかを聞き取ることから始めて、それが果たして今までやってきた方法論で太刀打ちできるのだろうかということを探りました。これは3年間のプロジェクトで、本当にストレスで胃潰瘍になりそうになりましたが、その中でクラス15人の少人数で、参加型・対話型の方法として、方法論を作りました。体系化をして、ガイドブックを作るというところまで行っています。現在、2024年の段階で、5人の教員で、29クラスの体験の言語化という授業が走っています。これは全部同じ方法論で、同じシラバスというところまで来ています。

ここまでで、そのクラスは何をやっているの？と思われると思いますので、まずは学生に発信した動画シラバスを見ていただきたいと思います。

(動画視聴)

この動画も頼んだわけではありませんでしたが、TAたちが作ってくれたものです。TAたちにも

また思いがあるのだなと感じさせる作品でした。まず何より大事なものは、先ほどのように、心に引っ掛かった場面を切り取る。そのときの自分の気持ちを振り返る。そして言葉を探す。ここからスタートしていき、最後に、後半戦に向けてその自分の体験を社会につなげていく。そういう構成になっているのが、特徴としてあります。

さらっとご紹介しましたが、もう本当に大変で、開発で大変だったことを、一部ですがお話しします。まず自分が自分でやっていることを言語化することが、すごく難しいわけです。例えば私なら、現場に行き、学生に「どういう気持ちだったの?」「それどういうことなの?」というのを、まさに身体を使ってやっていたわけです。それが「言葉を紡ぎ出すことを通じて、自らを拓く」みたいなことを言っても、新しい先生はなにを言ってるかよく分からないわけです。拓くって何? 社会に対して広げていくってどういうことというように。「先生はなにを見てるんですか」「身体を見る」「身体を見るって、なにを見てるの」という具合です。別に洋服、脱ぐわけじゃないし、という冗談にもなるぐらいに、やっていることがうまく言語化できず、ガイドブックを書くのも大変でした。本当にやってるところに来て見てくださいという感じでしたが、うちの総長に、「匠の技をエンジニアリングする。まさにあなたが言語化しなきゃ駄目だ」と言われて、それを先生たちと一緒に頑張ったという点が、すごく難しかったことのひとつです。

まさに実践知なわけです。体験を言語化していくことを支援する。その中で、大学でやろうとすると、必ずこれを言われるのです。専門知はどこにある? 君の専門は何で、うんたらかんとらと言われるわけです。科研費ではどこに当たる分野の何とかだ、どういう理論が後ろにあるんだと。理論が最初に後ろにあるわけではなく、現場の実践の中から紡ぎ出してきたやり方ですというのが分からない。でも、実際に現場に来てくれた先生たちが、学生が拓くのを見るので、何でそんなことができるんだ、となるわけです。でも、そこが理解できなさすぎてすごい泣きそうという感じでした。でも、現場に来るとこうやって引き出すんですねということで理解されます。この辺でやめておきますが、理解されなかった背景や、あと先ほど言った 5 名の先生たちと職員、そしてプラス外部の専門家として、延べ数で 10 名ぐらいの専門家に関わってもらいましたが、研究者もこだわるところが違います。それぞれみんな思いがあるので、「言語化」という言葉を定義できないし、それぞれの視点は全部違うので、責められる、責められる。例えば私は気持ちに言葉を与えることは、ものすごく大事な実践なので、譲れませんでした。心理学の先生からは、それでトラウマを引っかき回したらどうするのだ、あなたはどう責任を取るのですかみたいに責められました。言葉にして、気持ちを表現するのに、これだけのリスクがあるということに怒られたりもしました。怒られてもという感じですが、「それではどういうふうに安全なやり方で、フォローアップできるか教えてください」という議論をしたりして、私の専門分野ではそんなことあり得ないみたいなことを何度も言われました。

でも、そんなこと言ったら、一人一人が自分のやりからでやるしかないとなりますよね。でも、私が受けた命は、WAVOC として方法論を体系化して、みんなができるような形で表現せよということですから、そういうお堅いことばかり言う研究者をまとめて、毎週 1 回、胃潰瘍になりながら作ったのがガイドブックです。ご興味のある方は見ていただければと思いますが、そういうことで、ちょっと思い出だけで胃が痛くなりますが、おかげさまで、それだけ責められて、ぼこぼこにされながら、それでも私はここだけは譲れない、こういうことだというのを、一生懸命、何度も、理事会でも発表させられ、他の先生たちにも発表してという形で、私自身はすごく鍛えられて、こういうことですと少し話せるようになる機会にもなり、私自身の学びのプロセスだったかなという気もしています。困難はまだまだあり、というか全然今も続いています。特にコロナ禍のときはそういう意味では本当に大変でした。まさに私の持っている体験の言語化のやり方というのは、身体を見ることで、身体がないところでどうやって学生の言葉を引き出すのかと

いうことで、大問題になりました。そんな形で私たち 5 名の教員の挑戦はまだ続いていて、To be continued の状態です。

最後にこんなふうに関難を抱えながらも、それでも学生たちは成長するという姿を見てもらい、終わりにしたいと思います。

(動画視聴)

2014 年から 10 年ぐらいの WAVOC の取り組みとしての成果ということになります。先ほど言ったように、コロナ禍が与えた影響はすごく大きくて、対面で学生の言葉を引き出すこと、体験から意味を紡ぎ出すこと、社会の一員としての当事者意識を涵養していくこと、こうしたことは、対面が当たり前だったので、対面であることにどのような意味があるのかを、議論する機会となりました。その中で、実はオンライン体験の言語化というのを作りました。それで 2 年間ぐらいは対応し、一応、学会にも発表させていただきましたが、実はオンラインのほうが社会課題の発見率が高まるというような結果が出て、ちょっとびっくりしたところもありつつ、それでも私自身は言葉と身体にこだわりたいという立場で、教室に来てほしい、顔を見てやってほしい、まさに対峙するっていうことをやってほしいと思っていますし、そこから紡がれる言葉こそが、リアルな世界と接続するために重要なのだという使命を持ち続けてます。

しかし、この辺もだんだん私が頑なになるので、オンラインのほうが学生にとってはやりやすい部分もあるんですという若い先生たちと、日々戦いをしています。今時、スマホやデジタルな言葉を持つ意味が、私とは意味が違くと学生に言われたり、いろいろあります。苦しいところもいっぱいありますが、私自身はまさに身体というものにこだわりたいというところで、しばらく体験の言語化を続けていくつもりでいます。ぜひパネルディスカッションで質疑応答させていただき、さらなる学びにつなげていければなと思っています。ご清聴、ありがとうございました。

パネルディスカッション

「学びとボランティア実践とを往復するには～言語化を意識する意味」

《パネリスト》

- 兵藤 智佳（早稲田大学 平山郁夫記念ボランティアセンター 准教授）
岡本 実哲（明治学院大学 ボランティアセンター ボランティアセンター長補佐）
砂川 秀樹（明治学院大学 ボランティアセンター コーディネーター）
及川 恵美（明治学院大学 国際学部国際学科4年）

《司会》

- 猪瀬 浩平（明治学院大学 ボランティアセンター ボランティアセンター長）

猪瀬 これから後半のパネルディスカッションに入ります。パネルディスカッション、今回、4人の方に発言していただきます。自己紹介を一言ずついただければと思います。よろしくお願いいたします。

砂川 ボランティアセンター、ボランティアコーディネーターを務めております、砂川と申します。非常勤で着任して、2年度を終わるところで、来年度から常勤のコーディネーターとして務めます。どうぞよろしくお願いいたします。

及川 あらためまして、明治学院大学国際学部国際学科4年の及川恵美です。どうぞよろしくお願いいたします。

岡本 ボランティアセンターでは、センター長補佐をしております。経済学部の岡本です。僕は普段、ボランティアとか自分自身はしないですけども、学問との結び付けというところで、特に今日、発言したいというふうに思ってます。よろしくお願いいたします。

猪瀬 それでは本題に入りたいと思います。基調講演いただきました WAVOC では、現場の体験と学術的な知をつなげることを教育目標にして、その中で独自の метод論を、体験の言語化を体系化しているという、非常にリアルな話をうかがい、そして何か鼓舞されるような発表いただきました。明学のボランティア・サティフィケイト・プログラムについて考えてみると、違いは先ほど兵藤先生が指摘してくださいましたように、ボランティアセンターには専任の教員はいなくて、ボランティアの実践指導するコーディネーターがいる。それと事務職員がいる。それと私や岡本先生がそうですけども、教員が兼任という形であるという形で、組織が違っているということがある。それと WAVOC は、さまざまな大学の中でも折衝をしながら、正課の授業を提供している。明学のボランティア・サティフィケイト・プログラムに関しては、正課も一部には使っているけれども、ボランティア実践の指導、そしてそれを融合させるような講座を作っていくという形で、独自のやり方をしているなど感じています。明学の場合は、ある意味、学部側から協力を得るということで、関わる教員の数はもしかしたら広いのかもしれない。ただ、それが実際、どういう指導をするのかに関して、各学部、学科から選出していただいている運営委員の方というのは、2年とかで変わってしまうので、その都度、戸惑いを感じられてということもあるのかもしれないということがあります。その辺、後で岡本先生、運営委員もされていたという立場もある中で、今、感じられてることを、スライドも使って話していただこうと思っています。

それともう一つ、WAVOC では、やはり体験の言語化に関して、方法論を喧々諤々議論しながら、

外部の方も入っていただきながら作ったということで、そして実際に学生のプレゼンテーションを見せてもらって、本当に成長して、言語化してる姿が伝わってきました。翻ってみて、明学では、今日の及川さんの発表、岩倉さんのプレゼンテーションのスライドを見ましても、及川さんに関しては、先ほど兵藤先生が評価してくれたように、ボランティアが自分とは何者かということを知る機会になり、そしてそれを言語化できている。ボランティア・サティフィケート・プログラムというのは、認証の仕組みをどうするのかということは、かなり考えられてきたけれども、じゃあ、結び付けに関して、具体的にどういうふうに指導をしていくのかとか、学生がどう学んでるのかということところは、できてるかもしれないけど、振り返る機会があんまりなかったなということがあります。今日はその辺、兵藤先生のいただいた発言を踏まえつつ、この5人で議論できればと考えております。

最初に兵藤先生の話聞いて感じたこと、聞きたいことを、まずパネラーレベルで発言していただくかなと思います。まず岡本先生から、兵藤先生の話聞いて考えたことありましたら、よろしくをお願いします。

岡本 まず初めに、言語化が難しいというお話を聞いたときに、これは日本の教育であったり、文化というのが非常に密接に関わってるなという印象を僕は受けました。日本人、ものすごくインプットが得意ですね。インプットが得意で、答えが定まっているようなテストはすごい得意なんですけれども、アウトプットはそんなに得意じゃない、世界的に見ても。自分の意見を言うというか、答えが決まっていないような回答というのは、非常に苦手なところがあります。そこをどう大学教育で～義務教育ではなかなか難しかったりもするので～養っていくかということころだと思うんですが、そのプログラムとして、こういったボランティアという活動を通して、自分のことを言語化していくというのは、非常にいい試みなのかなと感じているところです。

猪瀬 砂川さん、お願いします。

砂川 話を聞きながら、やっぱりこれは兵藤智佳でなければできない仕事だったと思いました。実は兵藤さんとは30年以上の友人でして、よくそんな呼び方をしています。今回、たまたま一緒になったという形なんですけれども、彼女のバイタリティーと、いろいろな人の意見を聞きながら、自分のやるべきことを実現する信念が、すごく大きな力を果たしたんだなと。その中で思ったのは、表現する／させる、あるいは、表現する機会を与えていくというのは、難しいところがあるんだろうなと。難しいというのは、技術的なものだけではなくて、心理学の先生からトラウマを刺激したらどうするんだと言われたという話がありましたが、そうしたことで。私はずっとLGBTQの活動やHIVの活動という、マイノリティーの傷に関わる仕事を、活動をずっとしてきたので、やっぱりマイノリティー目線なんです。そうすると、そこで表現することによって、あるいは表現したことに対する反応とかによって、傷つくんじゃないかって考えてしまうほうで。だから、そういう議論があったのも分かる。でも、それも踏まえて聞きながら、作り上げていったという手法というのは、とても興味深いなと思いました。

もう一つ、実は今日、ここに出るために、WAVOC編集、『ボランティアで学生は変わるのか』と、『ちょっとでも良くしたい』、また兵藤智佳さんが単著で出した『僕たちが見つけた道標』も読んだんですけど、学生に体験を言語化する技術を持ってもらうというだけじゃなくて、ボランティアセンター自体が言語化しようとし、発信しようとしてるということ、強く感じました。そうやって自分たちが発信するという視点、あるいは態度と、学生の体験の言語化・発信がつながってるからこそ、できていることでもあるのかなと思って、聴いておりました。

猪瀬 最後の点、私もすごく感じたところで、兵藤先生の言葉でも、匠の技術というのをどう言語化するのかっていうのに、果敢に挑戦するっていう。その点って、言語化することによって批判もされるし、違いが浮き上がるので、その意味では対立項かもしれない。でも、積極的にやることで、手法として進化していくんだなというのを、如実に感じたんです。及川さん、質問でも、コメントでも、兵藤先生のお話、印象に残った点でも、一言あればぜひよろしくお願いします。

及川 私自身にもあることなんですけれども、何かを絶対学んでいるはずなのに、それを何を学んだか、気づきを発表しようとする、やはりやばいっていう言葉とかで終わってしまって、やばいというのが、プラスの意味でも、マイナスの意味でも含まれているからこそ、何がやばいのかに気付くことができない。本当に内容がないというところが、若者だけではないと思うんですけど、日本人の問題点だと思ったのと、先ほど WAVOC の取り組みを聞いて思ったのは、ディスカッションをして、フィードバックしてる機会が多いなって思っていて。ボランティア・サティフィケート・プログラムでも、毎月、報告書を書いて、ボランティアセンターの方からフィードバックいただいているんですけど、ただ、他にサティフィケート・プログラムで取り組んでいる学生が、どのようなボランティア活動をしていて、どのような気づきがあるのかというのを、私は分からないので、他の方のボランティア活動であったり、そういった気づきを見られるような機会があったり、フィードバック〜フィードバックほどではなくても〜気軽にコメントできるような機会があると、もっと自分自身の視野が広がったり、新たな知識として取り入れることができるのかなと思いました。

猪瀬 今、3人の方から、兵藤先生の発表について感想ありましたけど、兵藤先生のほうからありましたら、よろしくお願いします。

兵藤 すごく果敢に挑戦して素晴らしいですねと、よく言われますが、挑戦したくて挑戦したのではないです。実は、事務長がいないので言いますが、彼女が、「お金、取ったんだからやって」というふうな。もうほとんど強制です。ボランティアセンターなのに。それで私は良かったなと思っています。当時の私は、怖いもの知らずだったのです。うちの大学は、すごい先生たちいっぱいいますが、何を言われるかが分かってない、分からないことの強さがありました。私は、自分が思っていること言うし、言ってみたら、攻撃が来た。こんなにけちょんけちょんに言われるのだと。分からないからこそできたというところがあります。なので、学生にも意味は分からなくてもいいから、とにかくあなたが感じていること、あなたが今、思うことを言ってみようというの、まさに私の体験でもあります。相手の反応を読んでしまう、ちょっと物分かりが良くて、相手のことを読める学生は足がすくむのですよ、言うことに。必ず攻撃されると思うから。そういう意味で、分からないという強さもあるなと、今、思ったのが1点です。

もう一つは、砂川さんへの応答ですが、マイノリティー支援の人には攻撃されますよ、それはそれは。ただ、一つ良かったのは、まさに砂川さんたちと一緒にやってきた、ある NGO で取り組んだ自助グループのときに、ルール作りを一緒にしていた経験です。この場でどういうルールを作ろうというのを、最初に共有する。例えば発言に対しては、絶対に否定をしないというようなルールをつくりました。あとは、道徳的判断、善悪、道徳の判断をするコメントをしないとか、良い悪いを言わないとか、そういうルール作りをしていたんですね。それがすごく参考になって、授業でもグラドルールといわれる最初の決まり事をみんなで共有しています。それだけでもかなり学生の中では安全性が高まるということで、良かったなと思っています。いろんな所で自

助グループが持っている方法など、そういうのを使わせていただいたことは、大学でもすごく通用すると思いました。

猪瀬 今の兵藤先生のお話聞いて、会場から質問、ここで受けてもいいような気がするので、質問、発言があれば、ぜひいただきたいんですけど、いかがでしょうか。

参加者 社会学部附属研究所でソーシャルワーカーしております。皆さん、ご発言、ありがとうございます。兵藤先生と砂川さんの発言に関連してお尋ねしたいんですけども、例えばマイノリティーの立場でいろいろ発言することで、理解してもらえないとか、あんただけじゃないよとか、被害者っぽいこと言わないでよとか、そういうことを言われちゃうので、自分の気持ちを言うというのは難しいということ、砂川さんがおっしゃっていて、本当にそうだなと思っていました。

兵藤先生から、だからこそ自助グループなんかでのルール作りが大事だということも、本当そうだなと思っていました。私が考えてるのは、そういう設定された場面、授業であったり自助グループであったり、そういう所では、こういうことを大事にして今日は聞こうねとか、話し合おうねということが出来るんですけども、一歩社会に出たときには、そういうルールだけじゃないものがあると思うんですね。なので、自助グループや授業で大事にしようねって行って、そこで学んで、そこで発言できる人たち、学生たちであったり、人たちがいるんですけども、それを社会に出たときに、どうしていったらいいのか。安全な場所で発言できるようになることと、一歩社会に出たときに、それをどう広めていくかをいつも考えているんですけども、何か兵藤先生や砂川さんからご経験なり、コメントいただけましたらと思います。

兵藤 一つは、私はドメスティックバイオレンスのシェルターの支援をずっとしてきているんですけども、まさにシェルターは繭の中でという意味ですが、そこで力を蓄えるんです。現実社会がどれだけ厳しいか、現実社会の荒波にもまれても生きていける力をつけましょう、と。私はちょっと大学って似てると思っています。大学という場所で、授業が保障され、言論の自由がある場所で、自分のことを語ってもいい。建前ではありますが、そこで力をつけてほしい。その力をつけさえすれば、現実の社会に行ったときに、どう生きていくかは、それはあなたに託すと、そういう場でありたいなというふうには思っています。

砂川 私自身は実はあんまり答えを持っていなくて、どうしていくかというのはないんですが。私、LGBTQ 関係の講演の講師をよく務めるんですけども、その中で、社会全体ががらっと変わるってことはないので、理解する人、あるいは理解される空間、場をたくさんつくっていくしかないという話をするんです。だから、外に出て、傷付いたら、傷付いた人が戻れる場をつくるしかない。私、どっちかという個人心理よりも、仕組みのほうで話をするんですけども、そこに逃げられる場所、あるいは戻って傷を癒やされる場所、関係。そういうのを増やしていくしかないって話をするんです。それと私、一応、文化人類学者なので、社会の仕組みから見るんですけども、その話と、兵藤さんの話した、本人が力をつけるってこと、双方からやっていくしかないのかなと、聞きながら思いました。

猪瀬 シェルターとしての大学、安全に語れる場の話というの、重要な論点になるのかなと思うんですけど、明学のほうの話にも入っていきなと思います。砂川さんから、また、及川さんからも紹介いただきましたが、ボランティア実践の活動記録を出してもらって、それに対して

リプライするという話がありました。それから磯野さんが紹介してくれましたけど、ボランティア・サティフィケート・プログラムだけではなくて、ボランティア大賞という場でも、学びと実践の融合について発表する場があって、そういうときにも学生のほうに、さまざまに指導するというか、支援するっていうことをやってると思うんですけども、そういったときにポイントとして考えてるところとか、その辺の話をぜひ、今日、言語化していただけるといいかなと思ってるんですけども、いかがでしょうか。

砂川 磯野さんのほうから報告がありましたように、ボランティア・サティフィケート・プログラムには、三つの要件があります。そして、要件ではないのだけれども、学生が活動したことを報告して、コーディネーターがそれに対してフィードバックのコメントを書くんですけども、正直、学生によって書いてくることの濃淡がだいぶ違うというか、すごく熱心に書いてくる学生と、ちょろっと、それこそ言語化されてないような感じで書いてくる学生がいます。でも、昨年度着任してから、サティフィケート・プログラムの報告書を読んで、フィードバックを書く仕事を始めたときにまず感じたのは、ボランティアを熱心にこんなにやっていて、それこそこんな面倒な報告書を書く学生が、すごくたくさんではないけど、いるんだっていう感動でした。その一方で、フィードバックをどう書いたらいいのかわかって、すごく迷ったんですね。報告してくる中で、こういうところ、よく気付きましたねと感心したこととか、あるいは質問みたいなのがあったら答えたりだとか、励ましみたいなのを書くんですけど、それをしばらく続けて、1年目はそんな感じが中心でした。

でも、これをずっと続けていても、学生ってどうなんだろうって。ずっとこれ、何年間も続けるとつまらないんじゃないのかなと思い始めて、どちらかというと、どう情報をプラスするかみたいなことを考えるようになったんですね。例えば日本語学習のボランティアをしている学生がいたら、語学学習にはどういうことが影響するか、どういう研究がされているか、ちょっと簡単に書いて、その研究のPDFを貼ったりして。手話のことをやってる人には、例えばLGBTQのろう者の人たちからの発信で、いかに手話が変わってきたかという話を伝えるかとか。だから、本人が別に感想の中でそういう話してるわけではないんだけど、そういう一つプラスするということを考えるようになりました。精神保健の関係をやってる人には、NHKの番組でこういうのがあったよとか、ドキュメントでこういうのがあるよっていう、精神保健で参考になる情報を伝える。ボランティア活動のLINEグループで、あんまり発言が活発じゃないのはどうしたもんかという内容には、LINEでなぜ活発ではないかについて書かれてる記事を読んで、これは確かに言えるねっていうのがあったら、それを教える。

そういうことをやってるうちに、だんだん深みが増していくのを感じたんです。WAVOCのほうはどちらかというと、グループ活動や授業の中で、体験を言語化する。何人かの前で発信して、フィードバックもある中で、発達していくわけですけども、報告書は一对一のやりとりなので、そこでその人のやってることに対して、どう私が深まりを与えるかっていうのが役目だと思ってやってきました。そういうのをやっていくと、特に熱心だった学生は考える力にも深まりが出てくるんですね。必ずしもボランティアの内容だけじゃなくて、特にサティフィケート修了のための活動時間をクリアすると、自分の関心のある社会課題について書いてくれたりするんです。今日、残念ながら体調不良で休まれた岩倉日南子さんは、最近だと、例えば『安楽死を遂げるまで』という本を読んで考えたことを書いてくれました。考えたことも、1年次の倫理学ではこういうのを習って、3年次ではこういうのを、4年次はこういうのを習った、生命倫理系のことを授業で学んだ。その結果、自分がどう考えたか。結論は、「本当に分からなくなった」というものでしたが、学び、考えた上での彼女のこの問題に対する結論の人は、ある意味、素晴ら

しいと思います。そういうことを書いてくるようになったりします。

あと関係も深まっていくところがあるんですね。例えば学生がちょっと、悩みをぼろっと漏らすことがあります。そのことについて、長いフィードバックを返すことで、自分のことを開示してくれ、いろんな相談をしてくれたり。そのように、考えることと関係をどう深めていくかということがあるかなと思いました。そういう学生とのやりとりの中で、私自身、本当にすごく刺激を受けて、いろんなことを考えました。また自分の活動を詳細に書いた内容を読む中で、希望を感じて、とても励まされてきた。だから、お互い、本当に学び合ってるなという実感があって。そして、それこそ体験の言語化じゃないんですけども、その報告書を読んで、心を動かされたこと、時には心を動かされたということ、いかにちゃんと伝えるか。でも、たまに注意を促さなければいけないものも出てくることもあって、民族的なステレオタイプに関する内容が出てくると、それはちょっと違うんじゃないかと、いろんな例を取って書いていくとか、そういうやりとりもあったりします。そういうちょっと問いを投げ掛けたりするようなことを含め、私自身は、いかに学生の体験に何かプラスするかということ、すごく考えてやりとりしています。

猪瀬 実際、ボランティアセンターの会議などでも、なかなか聞くタイミングがなかったので、砂川さんがどういうふうに学生と接しているのかというのが理解できて、とても良かったと思うんですけど、1点。兵藤先生の話に身体というポイントがあったと思うんですけど、今のやりとりってというのは、基本、manaba という遠隔教育システムというか、それを使ってると思うんですけど、manaba 上のやりとりであるからこそそのいい点と、身体という要素がないからこそその課題とか。でも、それはこういう形でとらえてるとかとらえるみたいなどころについて、もし何かあれば、砂川さんに一言、いただきたいんですけども。

砂川 私自身は manaba でのやりとりから始まっているので、その中でしか考えられないところがあるんですけども。いいところという意味では、逆に対面だったら言えなかったことが言えたということがあると思います。もし対面だったら、言えなかったのではないとか。文章にするという行為自体の自己省察性というか。やっぱり書くときって、振り返るわけじゃないですか。振り返りながら、自分の経験を意味づけたり、あるいはあらためて考えたり。もちろん直接会って話す中でもできるんだけど、それとは違う、書くっていう作業の良さはあるのかな。

でも、サティフィケート・プログラムやってる学生とは、インテグレーション講座というものでしか会わないんですけども、会って何かをやるという経験があると、その意味がより意識されるんだろうなと思います。今のところ報告書のやりとりが中心で、対面が中心ではないことによる限界はあると思います。

兵藤 まさに最後に、ちょっとだけオンラインになったときのお話をしましたが、実は言語化という取り組みの中で、語ることを書くことがどう違うのかというのは、何回も聞かれました。それが私にも分からなかったときに、何をしたかという、日本語教育センターの先生の所へ聞きに行きました。学生が書くということを指導している先生に、書くということで表現することと、語るということはどう違うのか、先生は何をしてるんですかという話を聞きに行ったときに、まさに今、砂川さんのお話でいう、自己省察のプロセスですよね、書くというのは。なるほど、少し語るということと意味合いが違うらしいということで、その頭があったので、オンラインになったときに、コロナ禍では、体験の言語化のクラスは、書くことに集中してやりました。Zoomで同時に話すのではなく、とにかく毎回、毎回、書くということをやって、教員たちは学生が15人なので、それに一回一回返すということをやりました。面白かったのは、社会課題に対する当

事者意識が高まるかどうかというのを、心理学の先生に入っただきアンケートをやりましたが、実は書くほうが高まった。ちょっとショックですけど、良かった。ええ？と思いました。

ですので、やはり書くことには、それだけの省察させる力があるという一方で、これがオチですが、5人の先生がつぶれました。もう本当に大変です。15人、毎回、毎回、返し続ける。それも一応、体系化しようというって、問うということやりました。言葉を問う。ここに書かれている言葉を問い続けるというのをやったら、本当に先生たちがつぶれちゃって。もう二度とやりたくないとなって、実はこれは続けられないねということで、やめました。そこで明らかになったのが、私たちがクラスを作ったときに、グループダイナミクスで、それぞれがそれぞれの語りを聞きながらコメントを返すということを、ある種うまく利用していたことが明らかになって、いい意味では、教員の負担が少なくて済んでいたことが、それをやって分かった。なので、ちょっと答えにはなっていませんが、やっぱり違う。語るという作業をグループの中でやるということと、コーディネーターと学生がガチンコで対面でやるというのは、得ているものとやっていることが、どうも違うらしいというのは明らかになっています。ちなみに学会でも発表させていただいたので、その辺のことは面白いかなとは思っています。

猪瀬 ありがとうございます。及川さんにぜひ。先ほどの問題提起、非常に重要な問題提起かなというふうに思うんですけど。つまり、manaba で書いて、それに対してフィードバックがあるということは、意味があるというふうに語ってくださったと思うんですけども、他の人との対話がないという話のところで、一応、ボランティア・サティフィケート・プログラムの中では、インテグレーション講座ということで、毎年秋に発表する場と、それを聞いて議論する場が設定されていると思うんですけど、それでは実際、自分が言語化しているところとか、他の人が言語化しているところを共有するということには、足りない部分があるのかなという問題提起として受け止めました。実際、まず砂川さんがされてるような、言葉でのフィードバックがあることでの意味というところと、でも、他のサティフィケートしている人たちと、グループになって議論するとか、お互いの経験の中で共感したり、疑問を非常に印象的で持ったり、議論したりみたいなことの意味は、なかなかつづけてないことに関して、考えること、感じるがあれば、ぜひ一言いただきたいんですけど、よろしいでしょうか。

及川 先ほど兵藤先生が、語ることと書くことって違うとおっしゃったと思うんですけど、私的には語るよりも書くほうが、自分自身の理解が深まっていいのかなというふうに思っています。理由として、私は人前で話すというか、その場で考えて話すということが苦手で、その前に自分の中で文章化して、ある程度、意見を重ねてから話したいと思っているのが理由です。なので、サティフィケート・プログラムで報告書を書くっていう作業は、自分の中で今まで何をやってきたかとか、何に気付けたかっていう、ただボランティアをしたっていう満足感で終わらすのではなくて、そこから得た気づきっていうのを、しっかり見つめ直すという点で、すごい意味があると思っています。

猪瀬 一方で、他の学生との関係というか、その辺がないというのは、さっき言ってくれたんですけど、そこにもうちょっと補足する点とかがあればお願いします。

及川 ボランティアセンターの方からフィードバックをいただいて、次のボランティア活動につなげる、いい機会にはなっていると思うんですけど、例えば自分が書いたボランティアの内容

に対して感じるここというのは、本当に一つの事実に対して、人それぞれ感じている思いというのは違うと思うので、ボランティア大賞のときにおけるディスカッションだけじゃなくて、普段、まとまった、完成された文章を読むことで、ディスカッションの場の話し合いだけではなくて、何が深まったのかを、他の学生がより知る機会になると思ったので、フィードバックだけでなく、他の学生のボランティア活動を知りたい。さっき発言したのは、そういった理由からです。

猪瀬 砂川さんの方から何かありますか。

砂川 インテグレーション講座は、点的ですね。インテグレーション講座というのは、11月に3年目の学生、サティフィケート・プログラムを終える学生が発表して、1、2年生は聞いて、やりとりする。担当の教員がそこにおいてコメントや質問をするという形なんですけれども、そのときにあまりやりとり感がないということなのかなと思いました。及川さんは、今年度、インテグレーション講座で発表したと思うのですが、あまりやりとり感がなかったかなって感じでしょうか。その講座が、他の学生とのやりとりの場だけでも、それについてどう感じたのか聞きたいと思いました。

及川 話し合い、ディスカッションが盛り上がるというよりは、すごいという感情で終わっていたので、それ以外、話すことがないみたいな感じで、私のグループは静まり返ってしまったから、どうすればいいんだろうと思っていましたね。多分、もうちょっと時間がたてば、自分の意見を整理する時間はあると思うんですけど、その場でとなるとちょっと難しくて、まとめる時間が必要なかなと思いました。

猪瀬 岡本先生、いかがですか。

岡本 今のお話に関係するのですが、「オンラインか対面か」、「書くか話すか」というところについては、ものすごく違いがあると思っています。さまざまな研究で知られていることとして、直接話すっていうのは、すごいいい面があります。話を聞いてもらえると、セロトニンが出て、自己肯定感が上がるんですよ。今、及川さんが、インテグレーション講座でなかなかディスカッションにならなかったっていいましたが、聞いてもらっている側は、それを聞いてもらっていることに対して、すごい自己肯定感が上がっていて、自分のボランティアに対するモチベーションをあげるにあたって、ものすごくいい経験なんですね。その一方で書くっていうのは、確かに自分の中で完結して、書けはするんですけども、それに対して聞いてもらっている感覚がないと、なかなか自己肯定感につながらなかったりする。

次に、オンラインか対面かですね。オンラインか、対面かというところで、兵藤先生、体というふうにおっしゃっていたんですが、オンラインの弊害だと思うのは、デジタルデバイス使っているところですね。僕のポッケにスマートフォン、入っているんですが、このスマートフォンとかってものすごいドーパミンが出る、恐ろしい機械なんですけれども、それと同じように、パソコンを使って Zoom で話してるっていう状態って、それも似たようなところがあると思うんです。例えば、何か通知来た瞬間、皆さん気が散っているはず。通知がくると、ものすごいドーパミンが出るっていうふうにいわれています。なので、そういったデバイスを使っている時点で、うまく対話ができているというか、デバイスに気が取られてしまっているという点がある。もちろん、いい面もたくさんあります。移動時間が省けるとか。でも、対面で実施することの意義

は、ものすごく大きいと思います。

参加者 社会学科の教員しております。兵藤先生のご報告もとても良かったです。考えていたのが、言語化というときに、言葉にして人に対して出す・書くというときにも二つあって、自分が信頼してる人だけが読むのか、公に出して読んでもらうという、批判が来る、反論が来る、質問が来るという状態で書くのか。この人はそんなに批判や質問が来ないだろうとか、すごく自分のことを考えた質問をくれるだろうなという人との間で、書く・読むというのがされるのか。あと話すときでも、自分が言ったことをみんなが共感して、そうだね、そうだねと聞いてくれる状態で話すのか。それとも自分はどうしてもこれは言わなきゃいけない、それこそ社会を変えなくちゃいけないという形で、もしかしてそれに対して反対する人がいるだろうというのが想定される場合で話すのかで違うなと思って、お話を聞いていました。

特に最後の部分ですが、私も様々な調査を学生とも一緒にやっていますし、自分でもやっていますが、対象というか、協力していただく方が、医療に関係する、病気とかに関係する、ある種のマイノリティー性を持つて人たちになると、言いたいことがいっぱいあって、文章ではものすごく書けるけれども、それを公に出すのは嫌。それから匿名だったら少し話せるかもしれないっていうこともあります。それでも、やはり安全な部分だけ発言しておきたいというものがある。私なんかはすごくもどかしくて、もしその人たちが匿名でもいいので発言してくれたら、と。ただ質問が来たり、批判が来たり、反論が来たりする可能性はありますが、それでも発言してくれたらいいのになと思います。それが書く場合でも、話す場合でも、いかに力をつけるかというときに、学生に対して、もしくは授業で力をつけるというときに、どこに向かって力をつけるのか、書く力、表現する力なのか、それとも社会を変えよう、あなたが発言して、批判来るかもしれないけれども、大丈夫だよ、味方がいるんだよという、そういう信頼関係のつくり方なのか。兵藤先生のご意見を伺いたいと思います。

兵藤 おっしゃるとおりです。私もすごく悩ましいなと思いつつ、どこに向けて、あなたは力をつけようとしてるのかと言われたことと、先ほどのソーシャルワーカーの方が、現実社会の中ではどうするのですかと言われたことは、すごくつながって聞こえました。答えにはなっていないですが、そういう意味で、安全性を確保するというこでつける力が、果たして本当に現実の社会に出たときの力になるのかということの問いだと思いますが、分らないです。模索してるとしか言いようがないですね。ただし、社会を本当の意味で変えるのであれば、言わないといけないと思います。私も、その力をつけないといけないと思います。でも、その力というのが、攻撃されたときに、例えば傷付かない力なのかと言われると、攻撃されたら傷付くでしょうというふうに思いますし、じゃあ、その傷つきの体験の責任を一体誰が負うのか。言えといった私は、その発言に対して責任を負うのかとかどうだろう。分らないです。考え続けたいとしか言いようがないです。

砂川 そうだなと思って、私も聞いてたんです。聞いてる中で、書く、話すだけじゃなくて、発信すると、私的な、プライベートなのが、ちょうど交差する図で描けるんだろうなと思って、聞いてたんですけれども。恐らく先ほどの話を聞いてもらうと、セロトニンがって話があって、そうやってプライベート、比較的閉ざされた空間で話す中で、聞いてもらえたという経験を積み重ねていく先にしかないというか、その先にきっと公に語るとか、書くとか出すというのがあるんだろうなと思ったんです。どちらに向けてっていうのもあるんですけども。もちろんどちらかという特別な関係性の中で、あるいは閉ざされた安全性が確保された空間で、書く、話すとい

うことを繰り返していく。みんながみんな別に公に出していくわけじゃないんだけど、そこで力をつけた人が、肯定された人が、今度は社会に向けて発信していくということなのかなというふうに、私は思って聞きました。

マイノリティーの運動の中で、今日兵藤さんも触れていたような、自助グループの中などで語るということがあるのは、そういうことでもあるのかなと思いますし、私自身も周りでマイノリティーの人たちと、自分もそうですけども、見ていて思うのは、自分がしゃべったことを聞いてくれるんだということが分かった。そういう人が今度は、僕は今、あるレズビアン友人のことを思い出して話してますけども、自分の話を聞いてもらえることがわかった、それに力づけられた、そして外に向けて発信するようになっていったということがあって。大学の教室というのは、ルールを決めて、ある程度、安全を確保してみたいなことができるので、その中でそういうことを経験して、力をつけていく場なのだろうなど。その中で、社会を変えるため。ここでちょっとでも、世界をちょっとでも良くしたいとか、こういう思いを持つ人たちが、がんがん発信していくのかなというふうに思いました。

猪瀬 岡本先生が用意してくれた話に入っていきたいなと思っているんですけど、今の話を聞いていて、やはり WAVOC が提示している目標というか、教育・研究・実践を通して社会に貢献する、社会課題に対して当事者意識を持って取り組む人材を育成する、それから新しい社会のあり方を創造するっていったときに、新しい社会をつくっていくとか、社会を変えていくってことを意識したら、やはり公に向けて発信するという力を、最終的にというか、段階的には付けなきゃいけないということとして、組織的に意識してるんだろうなと思うし、うちのボランティアセンターも基本方針の中で、人びとが、小さい声、弱い声に耳を傾け、大きな力に頼ることなく、この世界を、他者と共に生きるために自ら行うはたらきであるといったときに、やはりそれは社会を変えるために、発信しなければいけないということがあるなと思うんですけど、そのときに、まずは安心してしゃべれるように、聞くっていう場を。しかも、安全な場を確保するというようなこととかがあり。ただ、その上で、以前、砂川さんと最初にボランティアセンターの話がうかがったときに、印象的な言葉で、エンパワーメントの場として、ボランティアセンターを考える必要があるんだっていう話をされていて、それが非常に印象的で、今もすごく心に残っています。

砂川さんがされている、例えば手話をやってる学生に対して、手話をやっていて素晴らしいねっていう話だけではなくて、そこで LGBTQ の発信で、手話がどう変わっていったのかっていう。そこでちょっとセロトニンだけではない、つまずきというか、そこで違和感を持つ中で、そこからさらに考えていくというプロセスが、まさに単に自分が一面的、しかも称賛されるとしか思っていない発信から、そこでまずは信頼できる範囲の中でコメントもらう中で、自分が外に出している言葉を築いていくっていうところがポイントとしてあるなど。

それから僕が昨日、今日と WAVOC の出した『ボランティアで学生は変わるのか』（ナカニシヤ書店）を一回読み直していて、やっぱりすごいなと思ったのは、狩り部っていう、動物を狩るという活動をしてることで。いわゆる害獣になってしまうイノシシとか、そういうのを狩るという活動をしていて、それが環境保全にもつながるしという話の中で。ただ、それってそのまま発信すると、動物愛護的な、それはそれで一面の正しさの中で SNS 上で攻撃されてしまう状況がある。それでも狩り部は批判を受けるということを感じ、それを予期しながら考えていくし、その中で、WAVOC としてはこの活動を続けることで学生はどう変わるのかを考える。一方で、学生自身も狩りをやる意味を考え、言語化していく。そのプロセスの重要性がとても分かりました。この点でも、まず安心・安全にしゃべる場をつくるということから、どうエンパワーメントしていくの

かっていうところは、今日いらっしゃる方々の中でも、それぞれ格闘、動いてるところだし、重要な課題として確認いたしました。

打ち合わせのときにも話したんですけど、コロナで大学が非常に防衛的になって、コロナのクラスター、出したらどうするのかっていう中で、対面的な活動とか、実際のオンラインじゃない活動に関して、すぐリスクを考えるようになってしまう中で、やっぱりちょっとでも危険性がある。危険性というのは、事故に遭うとかだけじゃなくて、SNSで批判されるみたいなことを含めた危険性で、それに対しての、過剰な防衛意識が働く中で、ボランティアも萎縮してしまうかもしれない。でも社会を変える、そのための主体を育てていくっていうエンパワーメントにおいて、やっぱり過剰な委縮をしない意識をどう持っていくのか画重要だなということを、今のやりとりで感じました。

モデレーター、しゃべりすぎっていう声が聞こえたので、ここで岡本先生に。学問と結び付ける、専門知と結び付けるという話のときに、岡本先生自身がボランティアを専門にしている教員ではない、そしてボランティア研究ではないという中で、ボランティアセンター運営委員になられ、そしてセンター長補佐になられるという中で、学問との結び付けっていうのは、実はなかなか難しいといわれてるけど、そうではないのではないかという、ポイントでプレゼン用意してくださいましたので、お話をうかがいたいと思います。お願いします。

岡本 ボランティアセンター長補佐の岡本です。先ほども自己紹介で言ったのですが、4年前に運営委員という立場に入って、そのときにボランティア大賞の実践部門で受賞した学生さんを実際にボランティアサティフィケートプログラムで指導したのですが、その学生さんは自身のボランティアと経済学との結び付けがすごく難しいと悩んでいました。他の学生さんも、経済学部生はみんな難しいと言います。僕から見ると、今まで見てきた全てのボランティアが経済学と結び付けられる。だけれども、学生さんたちはなかなか難しいという印象を抱いてしまっている。そこで、経済学が実際どういった社会課題に今日使えるのかっていう事例を僕からお話しして、その後で、どうやってボランティアと学問を結び付けてればいいのかをディスカッションで深めていければと思います。

当日は、「排出権取引市場」と「腎臓ドナーマッチング」を題材にして、SDGsに関する活動や寄付などのボランティア活動に学問を応用することで、その効果を大きくすることができる事例を紹介しました。

猪瀬 岡本先生、ありがとうございました。これ、聞いていて、それこそ市民活動の現場でっていうか、いわゆる経済的なお金のやりとりの話。例えばPTAの役員決めとか、団地の駐車場を決めるときとか、公平なのか、公平じゃないのか、分からないやりとりをしてるときに、こういう知見があると、実は合理的に決められる。ただ、そのときのポイントは、なんか岡本先生にだまされてるんじゃないのっていう感じにならないように。岡本先生の話のところで、兵藤先生、もしコメントあればと思いますが。

兵藤 ちょっとずれたところになるかと思いますが、ボランティアをした学生の中から、大学院に行く学生がいるというのは、傾向としてあります。自分がやったボランティアのなかで気がついた問題性を、もう一度、既存の学術知の中に戻して、さらに研究という作業を通じて、違うことで貢献したくなるというメカニズムはあるので、そういう意味での学術知と現場の問題性は、ひとつ論点だと思います。

もうひとつは、ちょっと批判的ですが、私が忘れられない学生がいます。うちの理工学部の原

子力を専攻していた学生が、福島に行きたいと私のところに来ました。というのは、私は福島の被ばくした高校生を支援していたので、先生と一緒に高校生に会いに行きたいと、自分から来た学生がいました。「僕は原子力という問題、原発というものが日本を救うエネルギーを信じていますと、ずっとそういう心理で、大学でも今原子力を勉強してますが、福島の事故が起きて、どうなんだろうという疑いをもち始めていました。でも、自分だけの中で考えるだけじゃなくて、その実際の被害を受けた人たちの声を聞きたい」と言っていました。でも、ネットとかではうそくさい。本当の声を聞きたいから、一緒に高校生のところに連れて行って欲しくないですかと、自分から来た男子学生でした。そして、福島の高校生の声を聞いて、勉強を教えることをやった学生が、やっぱり博士課程に行くと言って、実際に博士課程に行ったのです。既存の研究ではない研究の方法があるはずだ、この声をどう生かせるか、この声を聞いた僕でしかできない研究があるはずだ。でも、原子力への希望を僕は捨てないという視点にいったのです。学術とボランティアの往還って、こういうことなのかなと思ったことを、今、聞きながら思いました。役に立つよ、だけではなく、そこに一度、疑いを持ってみる視点というのも、ボランティアの可能性ではないかと思っていて、接続の仕方というのも、いろいろ考えてみることもできるかなというふうに思っています。

猪瀬 ありがとうございます。時間が来てしまいましたので、全体の議論を踏まえて、兵藤先生から最後、一言いただいて、終わりにしたいと思います。兵藤先生、一言お願いします。

兵藤 本当におめでたい日にお招きいただき、ありがとうございます。今日もディスカッションをさせていただいて、まさに対話の時間、そして自分の言葉で自分の思いを語る。まさにこの場こそ、体験の言語化をした時間だったのではないかなと思っています。そして自分たちの体験が、自分だけの問題じゃない。私たちの問題だという、私ではない問題に気がつかされました。しかし、やっぱり私にしかできないこともある。明治学院大学ボランティアセンターにしかできないこともある。そんな気づきをもたらす時間をつくることができたのではないかと思います。そのことに感謝しつつ、まさにみんなが参画して、ここから変革を起こして、そしてここから社会を変えていく。そんな可能性を感じさせていただいた、こういうイベントを企画した皆さまにお礼を差し上げて、最後のコメントとしたいと思います。ありがとうございます。

猪瀬 及川さん、砂川さん、岡本先生も、長時間にわたり参加して下さられた方も、どうもありがとうございました。これでこの縁を大事にして、ぜひ学生ともども WAVOC に一度、見学、交流に押し掛けたいなという気持ちを持っておりますので、引き続きましてよろしく申し上げます。それではパネルディスカッションのほうは、ここまでにしたいと思います。ご清聴、どうもありがとうございました。